木下杢太郎全集

第五卷

木下杢太郎全集 第五巻　第四回配本（全二十四巻）

一九八一年八月一八日　発行

定価四〇〇〇円

著者　太田正雄

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁五五
株式会社　岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・三秀舎　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田元吉 1981　Printed in Japan

目　次

蒸氣のにほひ……一
靈岸島……七
男の持ちける花……一三
追香記　車外の街　停車場……二三
波高き日……三三
荒布橋……四七
絶　望……七三
六月の夜……八一
爐……一二三
池……一三五
硝子問屋……一四三

北郷村の强奪――村里傳説集の一……一四九
珊瑚珠の根付……一六五
河岸の夜……一八三
沖の龍卷……二〇七
睡眠前……二一三
山の燒けた日の夕がた……二一九
北から南へ……二二七
夷講の夜のことであつた……二三五
柏屋……二五三
三人の從兄弟……二七三
葬式の前の日のこと……二八九
河岸の錨屋……三二一
靈岸島の自殺……三四三
船室……四〇五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

體格檢查……四三五
穀　倉(南國小景)……四七三
後　記……四九七

蒸氣のにほひ

復小網町を畫きに往つた。日本橋が近頃大好になつた。それには譯もあるさ。第一日本橋へ往くと旅人の氣になれる。本鄕邊にぶらついて居ると、どの人もこの人も皆自分に似た手間許り、「見給へ君、今凡てのものは崩されてるんぢやないか、言はば燒跡さ、お互に好い時に生れ合はした勞働者さね」なんて話し掛けられると、此方も平氣では居られなくなる。處が日本橋へ來るともう此處は他人の繩張りだ、雲烟過眼で濟まされる。固より人は誰を見ても忙しさうだが、その忙はしい內にも自ら纏まつた人生觀があつて、そいつを傍から見て居れば、丁度凡ての線が焦點へ集まる畫の樣に、ちやあんと額緣の中へ塡り込んで呉れる。

ところが今日はも一人吾黨の士に遇つた。老人の立坊先生だ。入り代り立ち代はつては御苦勞にも首を上げ下げし乍ら、畫と本物とを見較べて行つてくれる丁稚や日傭取君たちの內で、老人獨り踏み止まつた。夫も可いが、仕舞にはそこらに散らばつて居た伊豆石に腰を下ろして悠々と煙草を喫み始める。

「爺さん、閑かい？」
と繪に氣を取られ乍ら可い加減のことを言つたが、
「閑でも無んだ。」
と相變らず煙を吐く。
朝は好い天氣だつたが晝過ぎにはひどく曇つた。山キだの角山だのつて印のある河岸倉は急に身顫ひでもした樣に小ぢんまりとして來ると、其前をば伊豆や房州や銚子の方から來た船が急がしさうに、其癖悠々と漕いで往く。時々聞き取れない叫喚聲や笑聲が響く。
僕は例によつて、鼻謠を歌つたり、色々な切々の事を考へたりして晝をかいてゐた。其間にどうかすると近邊が非常に靜かになつてくる。すると偶然、僕が九歳の時、親父に連れられて始めて東京へ來た時の心持が湧いた。さうなると屹度、何より先、色硝子の色合が朧げに頭に浮ぶのが例である。さうだ、之は料理屋の二階から往來の鐵道馬車を眺めた時の印象が殘つて居るのだらう。其時分は喇叭だつたが、其響——それから東京臭い匂ひ、こいつは幾くら經つても忘れられない。
僕の親父は商人だつたから連れられて問屋廻りをした。少さい時分だつたから何處へ往つても愛想よく取りもたれた。その時、半紙の紙へ四角な最中なんかを載せて出されたものだ。それが果てると船の都合を聞くんだつて親父について狹い倉ばかりの通りを歩いた。すると突然倉が途切れて

橋が見えたと思ふと、苫をきつた船の中からつい此間まで郷土の方に居た船頭が、つい此間の儘でヒョツクリ首を出した時には、實際可笑しくつて笑はずにも居られなかつた。

「やーい、船頭さんや、船は何時出るだよう。」

直ぐ目の前に居るのに、親父は一丁も先の人を呼ぶやうに大聲で喚く。

「風が好きやア今夜でも出がすよう。」

これも劣らず太い濁つた聲だ。

「山崎屋で今買物をしたからな、あれをも載けてツてくれうよ、麻だ、麻がな十個許りだアぞ」

……

小網町——此時分から僕の馴染だ。

そのうち、又賑になつた。電車の響がどこかで急に騒ぎ始める。靜な——江戸百景頃の水を通はしてゐる此溝の後ろには、陸の東京の現代の活動があるなんて考へ出す。

時に目の前を岸に沿ふて、俵をしこたま積み込んだ船が通る。

突然、

「エヽツチ、良い匂ひをさせやアがる」

驚いたことには忘れて居た立坊先生大きな獨り言を言ひ出した。僕も鼻をぴくつかしてみる。別

に好い匂ひもしない。

「何がいゝ匂ひだってんだ？」

立坊はそれにも拘らず、尙も親しい調子で、

「なア、旦那お前さん一つ海の方へ往って畫くといゝんだ。」

「なぜ？」

「こんな河岸倉なんか寫ったってつまら無えぢやねえか。海アいゝぜ。私も之でも若え時分にやア船乘をしたんだ。思ひ出すな、あの溫い匂ひを嗅ぐと。」

成程さう聞けば、ペンキの蒸されるやうな、例の汽船の臭がする。今通った艀舟が殘して行ったのだらう。

「そんなにあの匂ひが良いってのか、あんな可厭な匂ひが？」

老人、恬で人の話には耳をも傾けず、何處かの方へ眸を据ゑ込んだ儘で、ひとりで饒舌り續ける。

「何でも少せい時分のことだから美かア覺えてねえんだがね、良い港だったぜ、靜かで。後ろにやア山があってな、橙なんか赤るんでたもんさ……

「夕方アいつでも鴨が島へとまりに集って來るんだ。そいつがピーく鳴くと觀音樣の鐘が鳴るんだっけ。——所が私の親父も船乘だったね、お前さん、其港へ匿ってた女に逃げられたんだよ。

ハハハ。」

立坊は目を細くして、如何にも回想に堪へない樣な面持で川下を眺める。丁度空は霽れ渡つて、夕日の光が灰色の雲の中から漏れ出すと、今迄居睡りをして居た白壁や煉瓦が急に輝き始めて、水の反射は老人の酒で赤らむだ顏に射る。

「そのお蔭で罪も無え子供が苛い目に逢つたのさ。畜生、年中ぶつくゝ、愚痴ばつかりこぼして居やアがつた癖に、手前も子供を打遣り放して何處へ往つちまやアがつた。お蔭樣で見ねえ、今こんな態よ。——でも好い處だつたなア、あの港ア。俺も今少つと若えとも一遍船乘をするんだつけに。」

と言ふと思ふと、急に何か見付け出して驅けつて行つてしまつた。——回想が終へると實生活が來る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

靈岸島

事務室の柱時計が今丁度六時を打つた。灣内汽船會社の構内は最早眞暗になつて、人の顏だけが辛うじて見分けがつく位。火の無い大きな火鉢に兩足を踏へて低首れてゐた男は、急に立ち上つて、兩手を高く伸ばした。

すると、又氣狂の女は俄かに亢奮し始めて、酢のやうに澄んだ美しい聲で、聲高に譯も分らぬことを喋舌り出した。怨むが如く、慕ふが如くとは是れだらう。時には何だか、自分の子を勞る樣なことを云ふかと思ふと、又戰爭を咀ふやうなことを言つたり、果は唯譯もなく笑ひ倒けて仕舞ふのであつた。附添の二人は宥めつ賺しつして、成る可く他の人に氣取られまいとするけれども、軈ては倦き腐つて、唯寛容の笑を漏らすのみである。

時に、外の方が非常に騷しくなつた。今艀舟が着いたのだ。まだ薄明るい棧橋から上陸つて、狹い木柵を通つて、此暗い構内に入つて來る人は、併し皆何れも、あの始めて東京に入つた時の一種の甘き不安な神經活動を起してゐるのである。

一人の男は「和田屋」と白く染め抜いた淺黄の大風呂敷を擔いで來た。其後へ、紺の風呂敷包を小脇に抱へた爺が隨いて、木柵を拔けやうとすると掛員に咎められた、「切符は？」

爺憮然たる顏して云ふには「俺や家の者だよ。」

掛員は譯の分らぬ目付で、凝と老人を睨まへてゐたが、急に氣を變へて「何處だ、お前さんは？」

「那古……」

「那古の汽船宿の人かね？」

「あい。」

掛員は笑って「今度つからな、家の人でも切符を買って來なくちや可けないよ。」

是等の混雜の中に立ち交って、草鞋脚絆の甲斐々々しい、一人の中學生が居る。回想と不安との堪へ難い樣な目付で、凡ての容貌、凡ての言葉を覗ってゐたが、軈て歸る人は歸り、船を待つ人は止まって、靜かに倚子に倚凭かった時、そっと木柵から拔けて棧橋の上へ往った。空には夕映がまだ殘ってゐて、河口に輻輳してゐる船舶の檣の間を、一羽の迷った鷗がひらひらと飛んでゆく。

水際の石垣に蹲踞んで、遠く眺め入った眸を直ぐ下の水に移すと、青や綠の種々な波紋の中に、水棹と夕雲の影が映る。

「先づ第一に知るんだな。」と旅裝の少年は恁う獨言ちた。手の蝙蝠傘を伸して、其先端を僅か

に水面に觸れさせ乍ら、書くともない戯書をしてゐる。書いたとて殘つて居る筈がない……併し彼は何を思つて居るだらう？　名譽だらうか？　「彼の人」だらうか？　否々さうではあるまい、戀の外、名の外に誰でも若い人が一遍は捉へられなければならない彼の甘い「人生の疑」に引つ絡まつてゐるのだらう。それで田舍から態々東京見物にやつて來る斯陽春の時を、旅に暮らす氣にも成つたのだらう。所謂青い花を追ふ人なんだらう。

すると、突然後ろの方で、

「マネなんかも隨分廣重や北齋の影響を蒙つたさうだからなあ。」

なんて聲がする。若い旅人が振返つて見ると、輪廓の崩れた鼠色の帽子を被つた男が、彼の木柵に倚つて畫をかいてゐると、黑い長い外套を着た角帽が恁う話しかけてゐるのであつた。

「僕等あ實際の事をいふと、ラフアエロや、アンヂエロなんかよりや、ミレや、モネの方が面白いからなあ。何だつてぢやないか君、マネなんかがサロンで頗る評判が惡かつた時、一人の日本人が居て非常に感心して、西洋へ來て始めて畫らしい畫を見たつて言つたさうぢやないか。」

畫をかいてゐた人はその方に氣を取られ乍ら、「矢つ張君、國民性つてえ者が恐しいもんだからなあ。」なんて言つてゐる。

「併し此處は面白いね。屋根がうんと上の大部分を占領して、其下に模糊と檣の列が見えてさ、

前景に遠く眺める人が居るなんだあ、君、現代的だね。」

其間に空も暗くなつたから、遠く眺むる若い旅行者は構内に入つた。最早電燈も點いて居た。

彼の氣狂の女は居睡りでもしてゐるのか、靜かに低首れて居た。嚮の高く手を伸ばした男は、まだ青白く外の色を映してゐる玻璃窓の下の物賣る女から、饅頭かなんかを買つてゐた。

其時丁度表へ止つた車がある。二人の女と一人の老漢が入つてきた。一人の女は四十許の下町風で、一人はまだ十五六の小娘。

「あらまだ七時にならないよ。ぢやまだ一時間待つんだね。」——それから例の女の話がいろいろと始まつて、それが終へて暫く靜かになつた沈默の後で、内儀が尙ほ續けていふには、

「私は之れで歸るからね、……ぢや叔母さんに逢つたら宜敷ね——私も少許閑になつたら伺ひますつて——謙坊もね、今が大事の時だから、油斷をしちや可けないつてね……ぢや阿爺や宜敷賴みますよ……寒いと可けないから、船へ乘つたら直ぐ毛布を被つて横におなりよ。ぢやお大事にね。」

で内儀は立ち去つたが、復戻つて來て、何やら聞こえないことを言つた。

「え、分つてゐてよ。」

娘は懊惱氣に恁う答へた。

此一群が靜まると、滿堂はまた暫く溫い寂寞に滿たされた。若い人生問題を背負つた旅行者は、

時々脚絆から眼差を擧げて、暗い電燈の光を浴びた娘の豐頰を愉み見る。いや併し彼は決して此際一片の邪念などは插みはしない、最早彼は氣狂の女や、かの娘の會話を聞いて、凡ての疑は釋然として解け去る可き縹緲の國を預感して居るのである。

回想や、物語や、名畫の寫や――凡て是等の夢や吐息の織物から拔け出た印象は、渾然として集つて、彼をたとしへもなき甘美の憧憬の雰圍氣の内に置いたのだ。

時に遠く、世に厭きた人の呻吟の樣に、汽笛が一聲聞こえて來た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.